

# ママさん医師を応援

## 変則勤務制・登録紹介システム

女性医師で、出産や子育てのために離職する人が少なくない。泊まり勤務が多いなど、育児との両立が困難な労働環境のためだが、女性医師を活用するため、状況を改善しようという動きも出てきた。

(榎原智子)

医療センターに勤める小児科医、寺田志津子さん(48)は、出産後に10年以上、職場を離れていた経験がある。1998年に長男が生まれ、3人の子の育児中は、フルタイムで

また、医師らで作るNPO法人「女性医師のキャリア形成・維持・向上をめざす会」は今年、育児支援や勤務体系の柔軟さなど、働きやすさで病院を評価する取り組みを始めた。これまでに、大阪厚生年金病院など2病院を「女性医師とすべての医療従事者にやさしい病院」に認定した。同会代表の龍野敏子さんは

東京都の兵藤博恵さん(36)は週3日、都内の病院や診療所などでアルバイトの産科医として働く。下校時間が早い小学4年生と5年生の子とも2人のため、午後2時には帰宅するためだ。

「保育園と違い、小学生の学童保育は午後6時で終わり、通えるのも3年生まで。働きたくても、フルに働くのは当分無理だと思っています」

兵藤さんは大学卒業後、都内の病院で働き始め、2度の出産は産休だけで職場復帰した。子どもを長時間保育のある保育園や近くに住む実家の母に預けて連日午後10時まで働き、週3回は泊まり勤務という激務だった。3年前に夫の米国留学を機に退職。帰国後は、子ども2人を育てながら常勤は無理と判断した。

「医師が働く環境がこれほど厳しいと、子どもを持った多くの女性医師は一線を引かざるをえない」と話す。

大阪市の国立病院機構大阪

### やめないで！ 帰ってきて!!

働くことはやめ、保健所での予防接種や健康診断などで月2、3回パートで働いた。末の子の小学校入学を機に職場復帰を考えたが、義理の両親と実家の母が体調を崩し、介護で見送らざるをえなかった。

今の職場で働き始めたのは、介護が一段落した8年前。先輩女性医師に再就職について相談し、紹介されたのが縁だった。「子育てであつという間に10年余が過ぎた。子どもがやっと手を離れ、今始めないと一生仕事に戻れないと思った。でも、復職のきっかけがつかめないままの人が少なくない」と話す。

女性医師が仕事と子育ての両立に悩み、職場を去る例が後を絶たない。資格を持ちながら離職したままの人が少なくないのが現状だ。

こうした中、両立できる環

の危機感が強まっていることが背景にある。

寺田さんが勤める大阪医療センターでも昨秋から、「女性医師の勤務環境改善プロジェクト」が始まり、変則時間勤務や再就職支援研修コースなどが導入され、利用する女性が出てきた。

同プロジェクト担当の統括診療部長、山崎麻美さん(56)は「子どもを持つても安心して働ける職場を組織的に作っていかねければ、育児や介護の経験は、患者さんの生活面の理解を助け、よりよい医療にもつながるはず」と話す。

国立病院機構近畿ブロックは2年前、育児で退職した女性医師を対象に「ママさん医師登録システム」を作り、女性医師を探す医療機関とのマッチングを始めた。国も今年度から同様の「女性医師バンク」を創設する方針だ。

「ある地域の勤務医は4分の1以上が週80時間以上働いていたという調査結果もある。どんなスーパーマンでも子育てなんてできない。働きやすい環境を作ることが男性にも必要です」と話す。